



Title	香嬌と雪佳
Author(s)	榊原, 吉郎
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 172-173
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53252
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

香嶠と雪佳

榊原吉郎

谷口香嶠（元治一年～大正四年）は明治四十年の第一回文展に『残月山姥図』を出品し三等賞を受賞している。榊原雪佳も『山姥図』を遺している。この両作品の比較検討により、雪佳の一側面を解明することが今回の発表目的である。

雪佳の作例の多くは「琳派風」の穏やかな、華麗な様相を呈するが、その華麗さとは全く質を異にするのが『山姥図』である。本図は展覧会に向けて雪佳が創作した作品と推定することができるのであるが、展覧会出品の記録は現在のところ確認されていない。

謡曲の「山姥」は伝統的な演劇空間の中に包まれた存在であるが、それとは別世界である雪佳の『山姥図』は平面空間の場に持ち込まれた「山姥」と言える。言葉を変えれば、雪佳の伝統演劇に対する理解、更に踏み込めば彼の能楽解釈論へと展開する可能性も見えてくる。雪佳と能楽との関係を探るには、幾つかの道が想定することができるが、今回は彼が所持していた金剛流謡曲本と画家・谷口香嶠について考察する。

雪佳の『山姥之図』と香嶠の『残月山姥』図には共通する雰囲気が見取され、雪佳の一側面を解明することができる。雪佳も香嶠も共に明治の京都画壇を支えた画人であるが、今日ではその存在を殆ど知る人が少なくなっている。香嶠に関して、原田平作氏は「京都の人、泉州出身の木綿問屋の息子として生まれ、深草の宝塔寺に庵を結んでいた小林三光という僧侶のもとで教育を受け、初めは医者になるつもりで東京へ出ていたが、姉の死により京都に帰り家業を手伝ううちに、元来好

きだった画業への精進がつのり、ついに明治十六年八月、榊原門に入塾し、画業の道が始まった。」¹⁾と記す。画風形成には幸野楳嶺から四条派の画法が伝授されていたことを示す。また家業が木綿問屋という職種には染織関係との深い関連性が想定される。

『残月山姥図』については「香嶠の代表作とされるもので、深山に住んで金太郎を育てたと伝えられる山姥を、残月と共に描く。はりつめた老婆の厳しさは身をひきしまらせるが、これは老婆を夢幻的な空間に設定するからではなく、より現実的な空間に坐らせているからであろう。香嶠は処世の厳しさをこれをもって表しているかのようである。」とも記している。

香嶠に対する評価を「香嶠は圓山四条派の底流となった花鳥諷月にあきたらず、新しい世界観を表現したかったにちがいない。その有職故実の研究は、知識におわらず、“もでの臭気を脱却する”（同上）までいたったとおもわれる。」と原田氏は結んでいる。

光悦・宗達が謡曲本の装丁と関わり「角倉本」を遺していることは周知の事実であり、雪佳が能楽に惹きつけられた意識の底辺には光悦・宗達へ憧憬があった。それは後年鷹ヶ峰の光悦寺再興事業に参画してゆくことにも係わってくる。雪佳の能楽理解が解明されると同時に、琳派の後継者たらしめた雪佳の位置づけも解明されることになるであろう。さらにこの予測の延長線上に「琳派」を理解するには「能楽」を欠くことができない、ということが示されてくる。これまでの「琳派」研究に欠落していた分野が能楽世界であり、

「琳派」と「能楽」との関連については未開拓の分野であったことは間違いないのである。

雪佳は能楽に結びつく仕事を多く遺している。雪佳と能楽を直接結び付ける資料が遺されていた。雪佳所蔵の書籍があり、その中に金剛流の謡本七冊が遺されていた。その出版奥付から、雪佳が入手した謡本は「別製本御届」とあり、金額も明記されておらず限定本ではないが別製本であり、特に配慮されたものであろうとも推定される。七冊本の全てを入手できたのは明治四十三年六月以降であつたろうと考える。

明治末から大正初めとされている『山姥之図』はこの特製の謡本を入手した明治四十三年六月以後の制作であろう、という可能性も推測できる。しかし、この謡本は「内百番五冊」と「外百番二冊」の二部に分かれている。謡曲・山姥は「内百番」に含まれており、内百番が出版されたのが明治三十八年十一月である。雪佳が山姥図の制作構想を持ち始めたのは明治三十八年十一月まで遡り得ることも当然考慮せねばならないと考える。なぜなら謡本の「御届」の字句解釈が出てくるからである。「御届」されたと同時に雪佳が入手したと解するならば、その時点は明治三十八年十一月五日以後に直ちに雪佳が入手したと推測することも可能であるからである。制作の下限は香嶠の『残月山姥』との関連を視野に容れ明治四十四年まで下げておかねばならないだろう。「御届」については当時の能楽が置かれていた社会情勢を考慮せねばならない。幕府の式楽であった能楽は明治政府により否定され、西洋音楽に取って代わられ、衰退していた。それを再興する機運が当時盛り上りつつあったのである。

この七冊の謡本は和装粘葉綴本であり、通称「枕本」と称される横長の版型である。背に「神坂雪佳」の朱文方印が捺されている。

それぞれ扉に朱文方印風に「金剛流謡曲内百番巻」「金剛流謡曲外百番巻」と印刷されており、「内」は巻から五まで、「外」は巻と式との七冊となっている。曲目が扉裏に記されており、二十二の曲名の上に鉛筆で丸印が打たれている。丸印をしたのは雪佳であろうと推定する。

丸印のある曲名を列記すると、つぎのようになっている。

「金剛流謡曲内百番」

「巻」高砂、熊野、芦刈、融、井筒、鉢木

「式」老松、清経、松風

「参」杜若、隅田川、鶴亀、三井寺、羽衣、海人

「四」藤戸、山姥、夕顔

「伍」葵上、蟬丸、猩猩

「金剛流謡曲外百番」

「巻」丸印なし

「式」弱法師 以上二十二曲

雪佳は「山姥」に鉛筆の印をつけていた。彼自身謡を習って謡ったか、『山姥図』を描くための取材であったのか、今日ではいずれとも決め難いが何等かの関心があったことに相違ない。謡曲「山姥」と雪佳の『山姥図』との関連性を見ておかねばならないだろう。ただ「山姥」に登場する女曲舞の百万が「百ま山姥」と称され、謡曲「百万」のシテを想起させるのであるが、雪佳が「百万」には印を付けていないことは留意する必要があるだろう。

「百万」はその根底に嵯峨清涼寺の融通大念仏の原曲があるとされており、晩年の住まいであった嵯峨野と関わりをもち、どこか因縁めいて来るものを否定できない。

1『京都画壇——江戸末・明治の画人たち』1977
アート社出版